

浜松医科大学医学部附属病院リハビリテーション科 山内克哉先生

診療科の成長と充実したリハビリテーション医療

山内克哉先生が2004年に着任した際、リハビリテーション科は医師3名、療法士5名という小規模な体制でした。しかし、現在では医師9名（専門医6名）、理学療法士28名、作業療法士15名、言語聴覚士8名の大所帯に成長しています。

対応疾患も脳血管疾患、整形外科疾患、呼吸・心臓疾患、がん、小児疾患、神経難病など多岐にわたり、独自の治療としてボツリヌス毒素を用いた痙縮治療、ダイナミックリハビリテーション治療、高次脳機能障害や嚥下障害の診断と治療、義足や装具の作製、医工連携による治療機器の開発なども行っているそうです。

さらにリハビリテーション治療の重要性が広く認識され、入院患者のリハビリテーション治療者数は20年前の50名から現在は300名にまで増加しました。

学生への講義とリハビリテーション医学の普及

リハビリテーション医学への関心が高まる中、山内先生は講義数を増やし、2023年の3コマから2024年には8コマを担当しているそうです。

「リハビリテーション医学、臨床栄養学、フィジカルアセスメントなど幅広い分野を教えることで、学生たちの関心を集め、次世代の医師育成に尽力しています。病院内でのリハビリテーション科の認知向上にも力を入れ、病院長への働きかけを通じて支援を受けるなど、積極的に行動しています。」と現在の様子について山内先生は語っていただきました。

医師トータルサポートセンターと女性医師支援

山内先生は「医師トータルサポートセンター」のセンター長を務め、静岡県医師不足解消や女性医師の復職支援に取り組んでいます。

「特に30代以降に減少する女性医師が診療・研究を続けられるよう、結婚や育児に対応した柔軟な働き方を提供しています。好評を博しているのが『院内学童保育サービス』で、夏休み中に小学生以下の子どもを約20日間預かるプログラムです。今年は定員30名に対し、100名もの応募があり、英語教育や科学実験、オーケストラ鑑賞といった多彩な内容が人気を集めています。」と話していただきました。

いたみセンターの設立と多角的な痛み治療

2023年に設立された「いたみセンター」について山内先生は、「難治性慢性痛の患者に対し、院内外の医療



山内克哉（やまうち・かつや）教授

2024年4月より浜松医科大学医学部リハビリテーション医学講座の初代教授に就任。愛媛県出身で高校時代まで剣道や野球に没頭する。1994年産業医科大学医学部卒業後、同大学リハビリテーション医学講座に入局。2004年浜松医科大学医学部附属病院助手として着任し、リハビリテーション科を立ち上げる。2001年エール大学、2010年ペンシルベニア州立大学に留学。現在、浜松医科大学医学部附属病院の医師トータルサポートセンター長、いたみセンター副センター長などを兼任。

機関と連携しながら診療を行っています。整形外科、麻酔科、リハビリテーション科、精神科などの専門家がチームを組み、多角的なアプローチで痛みの治療に取り組んでいます。患者のQOL向上を目指し、専門知識と技術を結集しています。」と説明していただきました。

医学生・若手医師へのメッセージ

山内先生は、リハビリテーション医学の将来性に魅力を感じて入局した自身の経験を振り返り、次のように語ります。

「リハビリテーション医学は、脊髄損傷患者への装具やロボットを使った歩行訓練、筋力増強や心肺機能の改善、糖尿病や認知症など内科疾患の治療、さらにはがんの進行抑制など、多面的な健康増進に寄与できる分野です。『患者を病気ではなく、一人の人間として診る』という理念を大切にしながら、人々の健康寿命の延伸に関心をお持ちの方は、ぜひ見学に来てください。」と、力強いメッセージをいただきました。

（文責 広報委員会）